

第7節 亀井古墳の検討

1 はじめに

亀井古墳のあるいわゆる河内平野は、古市古墳群のある羽曳野丘陵、前期から後期までの多くの古墳が造られた生駒西麓の丘陵地帯、茶臼山古墳・御勝山古墳などの存在する上町台地の、3つの洪積台地に、南・東・西の三方を囲まれた低地帯で、従来の古墳分布のうえからは、空白地帯とされてきたところである。

しかし、1975年の長原古墳群の発見によって、この地域にも古墳群の存在することが明らかとなった（長原遺跡調査会 1976）。その後、亀井古墳をはじめ、東大阪市山賀遺跡・同巨摩廃寺遺跡などでも古墳の存在が確認され（梅田 1980）（玉井・小野 1980）、現在では、かなりの広範な地域に古墳の分布する可能性が考えられるにいたっている。その分布範囲は、亀井古墳・山賀遺跡・巨摩廃寺遺跡発見の古墳などによって、洪積台地ばかりでなく沖積地にも及ぶことが明らかとなっており、古墳立地のうえからも注目されるところである。

このような河内平野での古墳の発見例の増加は、古墳の分布地域の拡大を意味するだけでなく、河内全体の古墳の動向の評価にも、再考を促すものであると考えられる。しかし、これらの河内平野の古墳は、その多くが後世の削平を受けており、内部構造・副葬品などの明らかなものはほとんどない。このため、これらの河内平野の古墳を、河内の古墳の動向のなかに位置づけようとする時、多くの資料的な制約を受けることも、また事実である。このような状況のなかで、亀井古墳は、内部構造・副葬品の内容などを、ある程度明らかにすることができたという点で、河内平野の古墳のなかに貴重な類例を加えたものと考えられる。その意味で、亀井古墳にみられる特殊性と普遍性を明らかにしようとすることも、河内平野の古墳のあり様を考えるうえで、あながち無意味ではないと考えられる。以下においては、亀井古墳の特殊性と普遍性を明瞭に示すものとして、墳形及び規模・供献用と考えられる土器群の出土・副葬品の3点を取りあげ、若干の検討を加えてみたいと思う。

2 墳形及びその規模について

亀井古墳が、1辺約7mの小形方墳であることは先述したとおりである。そこで、このような規模の方墳が、その大きさのうえからは、いかなる位置づけがなされるものかを、検討することからはじめたいと思う。

こころみに府下の方墳のなかで、墳丘規模の明らかなもの82基についてみると⁽¹⁾

- 1 1辺45～50m以上を有するもの
- 2 1辺30m前後のもの
- 3 1辺15m前後のもの
- 4 1辺10m前後以下のもの

の4グループのいずれかに含まれる例の多いことが認められる。この4グループは、単に墳丘規模のみによって細分したものであるが、以下に各グループに含まれる古墳を列挙しておく。

- 1 藤井寺市八島塚古墳・中山塚古墳・アリ山古墳・東山古墳・野中古墳・浄元寺山古墳・羽曳野市塚穴古墳・向墓古墳・太子町向山古墳・葉室古墳・高松古墳
- 2 茨木市鼻摺古墳・東大阪市五条古墳・二本松古墳・藤井寺市珠金塚古墳・助太山古墳・岡古墳・羽曳野市西馬塚古墳・栗塚古墳・富田林市甘山古墳・堺市吾呂茂塚古墳
- 3 東大阪市墓尾古墳・羽曳野市五手治古墳・堺市天王古墳・野々井13号墳・24号墳・27号墳・28号墳・30号墳・東大阪市山賀遺跡発見の1古墳
- 4 茨木市初田1号墳・東大阪市山畑18号墳・30号墳・藤井寺市赤面山古墳・青山3号墳・5号墳・6号墳・羽曳野市大半山古墳・太子町仏陀寺古墳・大阪市長原古墳群中の25基・堺市野々井古墳群中の19基・八尾市亀井古墳・巨摩廃寺遺跡発見の1古墳

さて、上記の第4のグループに含まれる古墳のなかで、内部構造・副葬品などから時期の推察できるものを抽出すると、初田1号墳は埴敷の横穴式石室をもち（大阪府教育委員会 1977）、仏陀寺古墳は横口式石室を有する点で（喜田 1912）、ともに古墳時代後期後半あるいはそれ以降の時期に位置づけられる。山畑18号墳・30号墳についても横穴式石室を有し、後期群集墳である山畑古墳群に含まれる点で（四条史編さん委員会 1977）、後期中葉から後半に位置づけられる。野々井古墳群中の19基の方墳のなかでは、野々井20号墳・21号墳・22号墳・23号墳・25号墳の5基が周溝内から出土した須恵器によって後期に位置づけられている（中村編 1978）。

一方、長原古墳群中の25基の方墳は周溝内から出土した須恵器・埴輪などによって、中期後半の年代観が与えられている（中西ほか 1978）。また、青山3号墳・5号墳・6号墳（大阪府教育委員会 1978・79）、野々井3号墳・7号墳・8号墳・9号墳・12号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳・17号墳（中村編 1978、井藤編 1980）、巨摩廃寺遺跡発見の古墳なども、周溝内から出土した須恵器・埴輪などによって、中期後半に位置づけられている。

ここで明らかなことは、1辺10m前後以下の小形方墳の場合、現段階では、中期後半に位置づけられるものが、より多いということと、それらの中期後半に位置づけられる小形方墳は、長原古墳群・野々井古墳群にみられるように、群集する傾向が認められるという2点である。とくに、多数の小形方墳が、限定された地域に相継いで築かれている点は、古墳群のあり方として注意しておきたいと思う。また、青山3号墳・5号墳・6号墳についても、数は少ないものの、3基が相前後して築かれている点では、長原古墳群・野々井古墳群と共通する傾向をもつものと考えられる。

次に、このような中期後半に位置づけられる小形方墳を、その群単位に比較してみると、長原古墳群・野々井古墳群にくらべ、青山古墳群では方墳の数が少ないこと、長原古墳群・青山古墳群の方墳が、中期後半の時期に限定されるのに対し、野々井古墳群のそれは後期にも継続する、等々の相違点が認められる。しかし、一方で長原古墳群と青山古墳群には、長原2号墳・3号

墳・4号墳・青山4号墳などの、造り出し状の施設をもつ方墳の存在すること、3つの古墳群中には、長原1号墳・6号墳・青山3号墳・野々井12号墳・13号墳・14号墳・15号墳・17号墳などの埴輪を伴わない古墳の存在すること、さらに、群構成のなかにいずれも前方後円墳を含むことなどの共通点も認められる。このように、中期後半に位置づけられる小形方墳には埴輪規模・群構成などに、いくつかの共通点が指摘できるのであり、前述の、それらが群集するということも含めて、そこに1つの傾向性が認められるものと考えられる。

これに対して、前述の1ないし2のグループに含まれる方墳のなかにも、中期に位置づけることの可能なものがいくつか存在する。それらは、野中古墳（北野 1976）・アリ山古墳（北野 1964）・珠金塚古墳（北野 1976）などであり、野中古墳の場合には墓山古墳の、アリ山古墳の場合には菅田山古墳（いわゆる応神陵）の、それぞれ陪塚的位置にあることが指摘されている（北野 1964、76、末永 1962）。さらに、内部構造・副葬品等の明らかでない東山古墳・西馬塚古墳・栗塚古墳・浄元寺山古墳・向墓山古墳などについても、それらが菅田山古墳あるいは墓山古墳に近接して位置することを重視するならば、やはり中期に位置づけられる可能性が強いと思われる。このように、中期の大形前方後円墳の周辺に方墳の存在することは、奈良県ウツナベ古墳の陪塚的位置にある大和古墳群の場合にも認められることであり（白石・前園 1974）、ここに、中期の方墳のもう一つの傾向性をみることができると考えられる。

この場合、上述の大形前方後円墳の陪塚的位置にある方墳と、長原古墳群などの小形方墳との間には、埴輪規模のうえからは、一定の隔差を認めてよいと思われる。しかし、それにもかかわらず、方墳という形態が両者に共通のものであることに留意するならば、野々井古墳群が陶器古墳群の分布地域にあり、青山古墳群が古市古墳群の範囲に内包されているという事実が注意されるのである。両古墳群の存在する地域が、古墳時代中期において先進技術の発露されたところであることを考慮する時、大形前方後円墳の陪塚的位置にある方墳群とは性格を異にするとは考えられるものの、野々井古墳群・青山古墳群等に存在する小形方墳も、大形前方後円墳を頂点とする中期古墳の動向のなかから生みだされたものであることが、認められるものと思われる。この点については、長原古墳群の場合にも、前述の、野々井古墳群・青山古墳群との類似性のうえから、同様に考えられるものと思われる。

亀井古墳が、群を成すものか単独墳であるかは、現段階では断定しがたいが、現在、調査が進行中である亀井遺跡の近畿自動車道建設予定地内においても、埴輪片の出土していることからすれば、ある程度の群構成を成していた可能性も考えられる。このことは現段階では保留しておくとしても、亀井古墳に、長原古墳群・青山古墳群・野々井古墳群などの小形方墳と、時期的にも墳形・規模などのうえからも、共通する要素が多く認められることは明らかである。このことよりすれば、亀井古墳もそれらの小形方墳の動向の中に、位置づけられるものと考えられる。

3 供献用土器群の出土について

亀井古墳の2号木棺上方からは、供献用と考えられる須恵器・土師器が一括出土した。古墳の墳頂部や造り出し等から、須恵器が一括出土する例は、後期古墳の場合にはまま見受けられることである。しかし、本古墳の場合のように比較的初期の段階に近い須恵器の場合、そのような報告例は必ずしも多くないようである。このため、このような例が中期後半の時期に、より一般的に認められることであるか否かを検討することは、本古墳を中期後半の古墳の動向のなかに位置づけるうえで、必要なことと思われる。

本古墳のように、主体部の上方から須恵器等の土器類を出土した例としては、まず、藤井寺市野中古墳が挙げられる。野中古墳では、副葬品としての須恵質土器のほかに、内部施設の床面から約0.6m上方を底面として、墳頂部全域に多数の須恵質土器片と土師器片が包含されており、それらの土器片のなかには、完形に近く復原できるものも含まれていた。その結果、本来、完形土器群が主体部上方の墳頂部に配列されていたものと推察されている（北野 1976）。また、大阪府美原町黒姫山古墳では、後円部の墳頂部から須恵器杯身片1点が出土している（末永・森 1953 a）し、岬町西小山古墳からも土器類の出土が伝えられている（梅原 1932）。さらに、藤井寺市鞍塚古墳の墳頂部からも、短脚1段透しの須恵器高杯が出土している（北野 1976⁽²⁾）。このうち、黒姫山古墳の場合には副葬品であった可能性が考えられているが、西小山古墳・鞍塚古墳の場合には、主体部内からは副葬品としての土器類の出土は伝えられておらず、野中古墳・亀井古墳などと同じ様に、墳頂部に埋置されていたものである可能性を考えてもよいと思われる。

一方、いわゆる初期須恵器といわれる段階の須恵器や、比較的初期に近い段階の須恵器のなかには、古墳の墳裾や周溝内から一括出土する例のあることが知られている。たとえば、大東市堂山1号墳では、墓域内から須恵器埴・甕・把手付埴が出土したほか、墳裾をめぐる円筒埴輪列の内側から須恵器器台・壺・有蓋高杯・土師器高杯などが出土している。墓域内の須恵器は副葬品と考えられているが（田代・瀬川 1973）、墳裾から一括出土した土器類については、供献用と考えてよいと思われる。また、前項で触れた長原古墳群・青山古墳群・野々井古墳群のなかには、周溝内などから須恵器類が一括出土している例がみられる。長原2号墳は造り出し状の突出部をもつ方墳であるが、その突出部から埴輪のほかに須恵器杯身・甕・筒形器台などが集中して出土している。長原4号墳も2号墳同様の突出部をもつ方墳であるが、西側周溝内と突出部から須恵器蓋杯・有蓋高杯・短頸壺・把手付小形壺などが出土している。長原26号墳では、北側周溝内から須恵器蓋杯・壺・甕が、南側周溝内から須恵器無蓋高杯などが出土している（中西他 1978）。青山3号墳では、北側周溝内から須恵器蓋杯3セットと甕が一括出土している（大阪府教育委員会 1978）。野々井17号墳では、南側周溝底部から須恵器蓋杯・高杯・壺などが一括出土している。さて、これらの周溝内から出土する須恵器類には埴輪と伴出することのあるほかは、他の遺物、とりわけ副葬品と考えられるような遺物と伴出する例は知られていない。このことからすれば、これらの須恵器類についても、堂山1号墳例と同じ様に、供献用であった可能性

が強いと考えられる。ただし、堂山1号墳の例を含め墳裾や周溝内などから出土するこれらの須恵器類が、野中古墳などのように、墳頂部に埋置されていたものか、あるいは、墳裾などに埋置されたものであるかについては、現段階では不明であるとするほかはない。

以上のようにみえてくると、少なくとも河内の場合には、初期須恵器あるいは比較的初期須恵器に近い段階の須恵器類が、古墳の墳頂部などに埋置されていた例は、かなり一般的なものであると考えられる。とくに、野中古墳・鞍塚古墳などの古市古墳群の大形前方後円墳周辺の古墳に、類例のみられることからすれば、それらは長原古墳群などの小形方墳にのみ認められるというような特殊な事例ではなかったものと理解されるのである。

なお、古墳の墳頂部に土器が埋置される例が、前期古墳に多く認められることは、すでに指摘されているとおりである。しかし、前期古墳の墳頂部に埋置された供献用土器群は、前期のある段階で、それらが副葬品に転化することによって崩壊するといわれている（小林三郎 1972）。この指摘に留意するならば、前述したように、初期須恵器をはじめとして比較的古式の様相をもつ須恵器類が、古墳の墳頂部などに埋置されている例の認められることは、須恵器の出現を契機に、墳丘に土器を埋置するような行為が再び行なわれるようになったことを示しているものと考えられる。ただ、この場合には、野中古墳の例にみられるように、その一部は当初から副葬品にもなっておりその点で、前期古墳の場合とは性格を異にする行為であったと考えられる。

4 副葬品について

副葬品のなかでは、2号木棺内から出土した甲冑類の組合せ関係が注意される。

古墳時代の甲冑については、多くの先学によって型式学的な検討・技術的変遷の跡づけが行なわれている。その結果、甲冑類の編年観はほぼ確立しているものといえる。一方、副葬品としての甲冑類のあり方のなかには、冑や甲の一方を欠く例や、1つの短甲内に複数の冑を納めた例などが存在するほか、型式学的な編年観によって出現の時期に先後関係の認められる甲冑類が伴出することも類例の少ないことではない。とくに、鋳留甲冑の出現から短甲が右脇に開閉装置を備えた横板板鋳留式に統一されるまでの間には、多様な型式の甲冑類の伴出がみられる。古墳時代中期といわれる時代が、より新しい技術の取得と開拓が古墳の副葬品にきわめて顕著にあらわれる時期であると認識されるならば、各古墳間にみられる甲冑類の伴出関係の差異は、新技術の取得と開拓の動態をも反映しているものと考えられる。

その意味で、亀井古墳の甲冑類の伴出関係にどのような様相が認められるかを検討することは、亀井古墳を中期古墳の動向のなかに位置づけるうえで必要な作業であると考えられる。

さて、副葬品としての甲冑類の伴出関係の検討のためには、1古墳ごとの個別の甲冑類の伴出関係の検討からはじめて、同時埋葬と認められる1内部構造内での伴出関係の検討、さらには、1古墳から出土する全ての甲冑類の全体としての伴出関係の検討という手順が必要であると考えられる。しかし、中期古墳の場合、内部構造の多くが竪穴式系統であり、追葬等を考える必要の

ないこと、複数の内部構造の認められる場合でも、横穴式石室の追葬に認められるほどの著しい時期差を、内部構造相互の間に考える必要の少ないこと、等々を考慮するならば、1古墳から出土する全ての甲冑類全体の伴出関係を検討するだけでも、そこにある程度の傾向性を読みとることが可能であろうと考えられる。また、甲冑類の伴出関係の検討にあたっては、その研究がもっとも深化されている冑と甲の両面から整理すべきものと考えられる。しかし、亀井古墳の場合、冑の型式が明らかにできていない。このため、以下では畿内における三角板革綴短甲と他の甲冑類の伴出関係について検討を加えてみたいと思う。

畿内における三角板革綴短甲の出土例の主なものには、大阪府和泉市黄金塚古墳1例（末永・嶋田・森 1954）、堺市大塚山古墳⁽³⁾例（末永・森 1953b）・七観古墳4例（末永 1933、樋口・岡崎・宮川 1961）、藤井寺市鞍塚古墳⁽⁴⁾1例（北野 1976）・丸山古墳1例（北野 1976）・野中古墳3例（北野 1976）、大東市堂山1号墳1例（田代・瀬川 1973）、奈良県御所市宮山古墳1例（秋山・網干 1959）、五条市猫塚古墳2例以上（網干 1962）、橿原市新沢139号墳1例（奈良県立考古博物館 1975）、奈良市円照寺墓山1号墳1例（佐藤・末永 1930）、京都府久世郡久津川車塚古墳5例（梅原 1920）、竹野郡ニゴレ古墳1例（京都大学文学部 1968）、滋賀県栗太郡新開1号墳1例（金関・鈴木・西田 1961）、和歌山県和歌山市天王塚古墳1例（村井 1973）、亀井古墳1例などがある。各古墳におけるこれらの三角板革綴短甲と他の甲冑類の伴出関係を示したものが第6表である。なお、伴出している甲冑類の型式が明らかでない堺大塚山古墳及び他の甲冑類の伴出が報告されていない宮山古墳・丸山古墳については、表から除外した。また、五条猫塚古墳の桂甲小札については草摺とする考えも提出されている（小林謙一 1974）。

第6表によって、各古墳の甲冑類の伴出関係を通観すると、まず、和泉黄金塚古墳・ニゴレ古墳・堂山1号墳などの革綴甲冑のみを出土している例と⁽⁵⁾、七観古墳をはじめとする鋳留甲冑を伴出している例の2者のあることが認められる。すなわち、

Ⅰ類 革綴甲冑だけを伴出するもの……和泉黄金塚古墳例、ニゴレ古墳例、堂山1号墳例

Ⅱ類 鋳留甲冑を伴出するもの……七観古墳例、鞍塚古墳例、野中古墳例、亀井古墳例、五条猫塚古墳例、新沢139号墳例、墓山1号墳例、久津川車塚古墳例、新開1号墳例、天王塚古墳例

の2類に大別することが可能である。この2類については、鋳留甲冑が革綴甲冑よりも後出の型式であることは、一般に認められているところであり、Ⅱ類の伴出関係により新しい要素の存在することは認められるであろう。

次に、Ⅱ類として一括した各古墳の甲冑類の伴出関係を検討すると、野中古墳・墓山1号墳の甲冑類に横刳板鋳留短甲の存在することが注意される。野中古墳の場合、横刳板鋳留短甲がすべて胴一連の構造である点に、若干の古い要素を認めうる可能性もあるが、横刳板鋳留短甲が短甲の型式のなかで、もっとも完成された構造であることよりすれば、野中古墳・墓山1号墳の甲冑

第6表 甲冑出土古墳（三角板革綴短甲と他の甲冑類との伴出関係）

種 類	衝 角 付 冑						眉 庇 付 冑						短 甲						頸 甲			厚 甲			草 摺			そ の 他
	三角板革綴	小札革綴	豎矧細板鋌留	小札鋌留	三角板鋌留	横矧板鋌留	革製	不明	小札鋌留蒙古弁形	小札鋌留	豎矧細板鋌留	菱形・三角板鋌留	不明	長方板革綴	三角板革綴	三角板革綴襟付	菱形・矢羽根形板鋌留	三角板鋌留	横矧板鋌留	革綴	鋌留	特殊型	不明	不	革製漆塗り	小札緋し	胴一連	
型式 古墳名																												
和泉黄金塚	2													1	1					1			1	2	1			
七 塚	5		1					1						1	4以上			1		1		2	1	3以上				
鞆 塚					1										1							1	1					頰当、脇当
野 中							3			8						3	5	3						8			1	
堂山1号	1														1													
亀 井								1							1						1			1	1			
五条猫塚									1	2					2以上						1以上							挂甲、籠手
新沢139号								1					1		1								1	1				
円照寺墓山1号				1		1			2			1	1		1以上			4	1		2		1	2以上		1		挂甲、籠手
久津川車塚	1		1	1				1							5								2					
ニゴレ		1														1												
新開1号	1									2	2			1			1	1					2					籠手、脇当
天王塚				1											1													挂甲

類に、Ⅱ類のなかでは最も新しい要素が認められるといえる。このことは、両古墳の場合、革綴短甲が襟付短甲という特殊な型式のものであり、他の短甲はすべて鋳留であることとも、矛盾するものではないであろう。

さらに、野中古墳・墓山1号墳以外のⅡ類の例をみると、五条猫塚古墳のように冑にだけ鋳留製のものが認められる例と、七観古墳・新開1号墳・亀井古墳⁽⁶⁾のように短甲あるいは頸甲など甲類にも鋳留製のものが存在する例のあることが明らかとなる。この両者の甲冑類の伴出関係を、新古の要素の混在の様相から比較すると、後者の七観古墳・新開1号墳出土の三角板革綴短甲に、革綴から鋳留への移行期の短甲であると指摘されている例の存在することが注意される。このことを重視するならば、後者により新しい要素が認められるといえるであろう。また、後者の甲冑類のより多くの部位に鋳留技法が認められることも、このような考えかたと合致するものと考えられる。

上述のことを整理すると、Ⅱ類として一括した甲冑類の伴出関係は、

- a 冑にのみ鋳留製のものが存在するもの……五条猫塚古墳例
- b 甲類にも鋳留製のものが存在するもの……七観古墳例、新開1号墳例、亀井古墳例
- c 横矧板鋳留短甲を伴出するもの……野中古墳例、墓山1号墳例

の3類に細分することが可能であり、この3類はa→b→cの順により新しい要素を含む伴出関係であると考えられる。

以上の検討によって、畿内の三角板革綴短甲を含む甲冑類の伴出関係には、多様な組み合わせが存在するものの、より後出と考えられる型式の甲冑類の伴出関係の有無という点から整理するとⅠ類・Ⅱa類・Ⅱb類・Ⅱc類の4類に細分されるものと考えられる。

また、この4類の様相は、Ⅰ類の和泉黄金塚古墳が、他の副葬品類の様相からしても、前述の三角板革綴短甲を出土した各古墳のなかでは、最も古い時期のものと考えられること、Ⅱa類の五条猫塚古墳に馬具・須恵器のみられないこと、Ⅱb類の七観古墳・新開1号墳出土の馬具類が、いずれも杏葉を伴わない最古式の型式であるとされているのに対し、Ⅱc類の墓山1号墳出土の馬具類が新式の型式であるとされている（小野山 1966）こと、等々によるならば、ほぼ各古墳の先後関係とも一致するものと考えられる。

しかし、Ⅰ類中の堂山1号墳、Ⅱb類中の亀井古墳から須恵器が出土している点は、上述のことと矛盾するものであり、若干の検討を要する。このことについては、Ⅱc類の野中古墳から須恵質土器の出土していることが注意されるのである。野中古墳の内部構造内及び墳頂部出土の須恵質土器については、その中に舶載品を含むか否かは問わないとしても、須恵器出現期のいわゆる初期須恵器の時期の遺物であることは認められている（北野 1969）。一方、堂山古墳出土の須恵器も初期須恵器といわれる一群の中に含まれるものである（中村編 1979）。また、亀井古墳出土の須恵器が、初期須恵器の段階よりは若干新しい様相のものであることは、第Ⅶ章で述べたところである。

試みに、前述の三角板革綴短甲を出土した各古墳のなかで、副葬されたもの、供献されたものを問わずに須恵器の出土の伝えられる例を挙げると、上述の3古墳に加えて、墓山1号墳・鞍塚古墳・新沢139号墳・天王塚古墳がある。このなかでは、出土の鞍金具が古式の一群に含まれると指摘されている鞍塚古墳（小野山 1966）の例が注目されるのである。鞍塚古墳出土の須恵器については、詳細は明らかにされていないが、古式の短脚1段透しの高杯であると伝えられている（北野 1976）。1例ではあるが、古式の馬具と須恵器が伴出している可能性が考えられるのであり、このことからすれば、馬具と須恵器が古墳にあらわれるのはほぼ近接した時期であったと思われるのである。また、須恵器は出土していないが、古式の馬具を出土した七観古墳、新開1号墳が甲冑類の伴出関係のうえからはⅡb類とされること、鞍塚古墳でも三角板鋳留衝角付冑が出土していることなどからすれば、その時期には、甲冑類の一部はすでに鋳留していたものと考えられる。

鋳留甲冑・馬具・須恵器の古墳への出現の先後関係が、上述のように認識されたとすれば、堂山1号墳にみられる甲冑類の様相は、より古い様相の残存したものと理解される。また、亀井古墳についても、出土の須恵器が、初期須恵器の段階よりは若干時期の下るものであることを重視するならば、同様に考えられるものと思われる。このような例を他に求めれば、新沢139号墳、兵家12号墳（伊藤編 1978）、などの甲冑類の伴出関係が、同様に考えられる。新沢139号墳では、第1表に示した甲冑類が出土しており、甲冑類の伴出関係からはⅡa類またはⅡb類に位置づけられるが、出土している須恵器は、亀井古墳出土の須恵器よりもさらに新しい時期のものであると考えられる。また、兵家12号墳の場合には、小札鋳留眉庇付冑・長方板革綴短甲・鋳留短甲・肩甲などの甲冑類が出土しているが、出土の須恵器は、亀井古墳出土の須恵器よりやや時期の下るものと理解される様相を示している。

畿内においては、大形前方後円墳の周辺において、より新しい技術段階の甲冑類が、より早く出現することはすでに指摘されている。その意味からすれば、亀井古墳・堂山1号墳・新沢139号墳・兵家12号墳などにみられる甲冑類の伴出関係は、より周縁的な様相であるとも考えられる。

5 まとめ

以上、前項までに行ってきた検討の結果からすれば、亀井古墳にみられる様相は、中期後半の古墳の様相のなかでは、特殊なあり方であると考えする必要はないものと思われる。甲冑類に、より周縁的ともいえる古い様相の残存することも、墳形・規模などの点で長原古墳群・野々井古墳群などの小形方墳と共通する要素の多く認められることと、矛盾するものではないと考えられる。墳形・規模、供献用土器と考えられる須恵器の出土、甲冑類の組み合わせ等からすれば、本古墳も前方後円墳を頂点とした古墳時代中期の墓制の枠内で、その性格を論ずべきものであろう。このことは、前述したように長原古墳群などの小形方墳についても、同様に考えられるものであり、1辺10m前後の小形方墳といえども、単に方形周溝墓等の延長線上にのみ位置づけられるも

のではないと考えられる。

〔註〕

- (1) 墳丘規模の多くは(大阪府教育委員会 1977)によった。ただし、アリ山古墳・東山古墳・野中古墳については(北野 1976)に、墓尾古墳については(原田 1971)に、山畑18号墳・80号墳については(四条史編さん委員会 1977)に、青山古墳群については(大阪府教育委員会 1978・'79)に、長原古墳群については(中西ほか 1978)に、野々井古墳群については(中村綱 1978)に、山賀遺跡発見の古墳については(梅田 1980)に、巨摩寺遺跡発見の古墳については(玉井・小野 1980)に、それぞれよっている。
- (2) 古墳の墳頂部から須恵器等の土器類の出土している例は(北野 1976)に紹介されている。本稿を草するにあたって、参考にさせていただいた。
- (3) 堺大塚山古墳の甲冑類の内容については、(村井 1973)で紹介されている三角板革綴衝角付冑以外に明らかにされているものはない。ただし、(末永・森 1953a)で第1号塚から三角板革綴襟付短甲の出土したことが紹介されている。なお、このことについては、(北野 1976)で紹介されている。
- (4) 鞍塚古墳・珠金塚古墳・盾塚古墳の甲冑類の内容については、(北野 1963)と(北野 1976)で紹介されているが、両書でその内容が異なっている。ここでは(北野 1976)によった。
- (5) 和泉黄金塚古墳出土の頸甲に型式不明のもの1個が含まれているが、これは接合部分を含まない破片である(末永・嶋田・森 1954)。なお、頸甲には第1表でも明らかのように、型式の明らかでないものが多いが、銀留頸甲を伴出する例には、第1表の亀井古墳・野中古墳・墓山1号墳以外に、黒姫山古墳・西小山古墳などがあり、横切板銀留短甲などのより新しい要素と認められる甲冑類との伴出関係を示す場合が多い。
- (6) 内容に不明な点の多い天王塚古墳、頸甲の型式を知ることのできなかつた久津川車塚古墳・鞍塚古墳・新沢139号墳については、検討に加えなかった。

〔第6表註〕

- (1) 頸甲の革綴・銀留は、前部引合板と左右の板との接合方法の相違にのみよっている。
- (2) 七観古墳の頸甲で特殊型としたものは、三角板革綴式と報告されている例(末永 1933)である。
- (3) 円照寺墓山1号墳の三角板革綴短甲については、三角板革綴襟付短甲が2領あった可能性があるとの指摘(北野 1969・'76)と、(佐藤・末永 1930)に報告されている三角板革綴短甲残欠とされるものの破片数の少なさを勘案した結果、すべて襟付短甲と考えた。
- (4) 久津川車塚古墳の衝角付冑に三角板革綴式1個と型式不明のもの1個が存在することについては、(村井 1973)で論じられている。

〔引用文献〕

- 秋山日出雄・網干善教 1959 「室大墓」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第18冊 奈良県教育委員会
- 網干善教 1962 「五条猫塚古墳」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第20冊 奈良県教育委員会
- 井藤徹編 1980 「陶器Ⅳ」大阪府文化財調査報告書第31輯 大阪府教育委員会
- 伊藤勇輔編 1978 「兵家古墳群」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第37冊 奈良県教育委員会
- 梅田正之 1980 「山賀遺跡から古墳を発見」摂河泉文化資料第22号 摂河泉地域史研究会
- 梅原末治 1920 「久津川古墳研究」
- 1932 「淡輪村西小山古墳と其の遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯 大阪府
- 大阪府教育委員会 1977 「大阪府文化財地名表」
- 1978 「青山遺跡第2回現地説明会資料」
- 1979 「青山遺跡第3回現地説明会資料」

- 小野山節 1966 「日本発見の初期の馬具」考古学雑誌 第52巻第1号 日本考古学会
- 金関恕・鈴木博司・西田弘 1961 「東東町安養寺古墳発掘調査報告 新開古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第12冊 滋賀県教育委員会
- 喜田貞吉 1912 「河内縣里の掘抜石棺に就いて」歴史地理19-2
- 北野耕平 1963 「中期古墳の副葬品とその技術史的意義」『近畿古文化論巧』吉川弘文館
- 1964 「野中アリ山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 大阪大学
- 1969 「初期須恵質土器の系譜」『神戸商船大学紀要第1類文科論集』第17号 神戸商船大学、西谷正編『考古学からみた古代日本と朝鮮』学生社 1978 再録
- 1976 「河内野中古墳の研究」大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊 大阪大学
- 京都大学文学部 1968 「考古学資料目録」2
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」(上) 考古学研究第20巻第4号 考古学研究会
- 小林三郎 1972 「古墳出土の土師式土器 I」『土師式土器集成』本編2 東京堂出版
- 佐藤小吉・末永雅雄 1930 「円照寺墓山第1号墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊 奈良県
- 四条史編さん委員会 1977 「河内四条史」第2冊 史料編I
- 白石太一郎・前園実知雄 1974 「奈良県特殊墳丘古墳地名表」『奈良県の主要古墳』II 緑地保全と古墳保護に関する調査報告2 奈良県教育委員会
- 末永雅雄 1933 「七観古墳とその遺物」考古学雑誌第23巻第5号 日本考古学会
- 1962 「古墳の周庭帯と陪塚」書陵部紀要第13号 宮内庁書陵部
- 末永雅雄・嶋田暁・森浩一 1954 「和泉黄金塚古墳」日本考古学報告第5冊 綜芸舎
- 末永雅雄・森浩一 1953a 「河内黒姫山古墳の研究」大阪府文化財調査報告書第1輯 大阪府教育委員会
- 1953b 「大阪府堺市大塚山古墳」『日本考古学年報』第3号 日本考古学協会
- 田代克己・瀬川健 1973 「堂山古墳群発掘調査概要」大阪府文化財調査概要1972-8 大阪府教育委員会
- 玉井功・小野久隆 1980 「巨摩廃寺遺跡」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第2回)資料』
- 中西啓人 1978 「長原」財団法人大阪文化財センター
- 長原遺跡調査会 1976 「長原遺跡発掘調査」(資料編)
- 中村浩編 1978 「陶邑II」大阪府文化財調査報告書第29輯 大阪府教育委員会
- 1979 「陶邑III」大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会
- 奈良県立考古博物館 1975 「大和考古資料目録4 新沢千塚資料」
- 原田 修 1971 「墓尾古墳」埋蔵文化財包蔵地調査概報8 東大阪市教育委員会
- 樋口隆康・岡崎敬・宮川渉 1961 「和泉国七観古墳調査報告」古代学研究27 古代学研究会
- 村井崑雄 1973 「衝角付冑の系譜」『東京国立博物館紀要』第9号 東京国立博物館

〔参考文献〕

- 北野耕平 1963 「中期古墳の副葬品とその技術史的意義」前掲
- 1969 「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」考古学雑誌第54巻第4号 日本考古学会
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」(上)(下) 考古学研究第20巻第4号 第21巻第2号 考古学研究会
- 野上丈助 1968 「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」考古学研究第14巻第4号 考古学研究会
- 野上丈助 1975 「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点」(上) 考古学研究 第21巻第4号 考古学研究会